

和田 知 久*
Tomohisa WADA *



金溟若の反共小説：『自由中国』掲載の「岐路」と「篩」をめぐって

Jin Mingruo's Anti-communism Novels: Concerning *Qilu*(Crossroad) and *Shai*(Sieve) in the magazine *FREE CHINA*

1. はじめに

かつて魯迅に将来を嘱望された若手作家がいた。その名を金溟若という。

1928年5月、有島武郎の著作集『叛逆者』を翻訳したものの、出版する術がなく困っていた金溟若は、同郷の劇作家である董每戡に連れられ上海の魯迅宅を訪問した。来意を聞くと、魯迅は驚嘆し「どこまで訳したのか」と更に問うたという。『叛逆者』は、魯迅自身も刊行当初に翻訳を試みたが、翻訳しにくい文体だったり、当時、中国では美術史に興味を持つ者が少なかったこともあり、途中で放棄していたのだった。金溟若が完訳していたことを知ると、魯迅は興奮して、彼に翻訳原稿を見せるよう求めたという。この翻訳は、魯迅による修正を経て、雑誌『奔流』に連載された。

しかし、良好な関係は長く続かず、程なく金溟若は魯迅の許を去る。抗日戦争、国共内戦と続く中、戦火に翻弄されたのは彼も例外ではなかった。国民党政府の台湾遷移と前後して、多くの知識人や作家と同様に金溟若は台湾へとやって来た。

1949年10月1日、北京にて中華人民共和国が成立すると、国民政府の台湾における統治の正統性は大きな挑戦を受けることになった。1950年6月に朝鮮戦争が勃発すると、アメリ

カ政府は台湾の戦略的地位の重要性を再び認識し、国民政府を支持するよう政策転換を行い、台湾島内の政治経済は安定したが、同時に世界の冷戦体制に組み込まれることになった。

1949年末から1950年前半において、国民党による文化ヘゲモニーの確立が進められた。検閲制度が整備され、国民党と政府、軍と情報機関によって、社会における各種文化活動に対して、政策的に干渉が行われるようになった。「反共反ソ」の文化運動を展開しつつ、政治権力は掌握した新聞などのメディアを通じて文芸活動にも合法的に介入し始めた。このような政治動員的な文芸運動は、その後20年以上の文芸政策の基調となった。

『自由中国』は、1949年11月20日、台北で創刊された創造雑誌である。発行人の名義は胡適であったが、実際の創刊者、主宰者は雷震であった。この雑誌は、党や政府が直接管理刊行するものではなかったが、自由民主をもって共産勢力の強権主義に対抗することを宣伝し、進歩的な方向へ漸進的に改革を行い、自由で民主的な社会を建設するよう、国民党政府を支持し、それに働きかけることを創刊の趣旨としていた。

この雑誌は政治と思想に重きを置くものであったが、毎号数篇の文芸作品も掲載しており、1950年代の台湾文学界の状況を窺い知ること

*中部大学国際関係学部国際学科

ができる。陳紀滢「荻村伝」、林海音「城南旧事」、於梨華「也是秋天」、朱西甯「大火炬的愛」などの著名な作品も掲載されている。

また、雷震主導の下、国内でも数少ない自由派知識人の結集地となり、雷震、殷海光らが積極的に時事評論を行ったことから、政界官界との距離が開くこととなり、1960年10月、雷震らが「中国民主党」の組織に失敗し逮捕されると、雑誌社は閉鎖され、停刊となった。

本雑誌の「徵稿簡則〔原稿募集概則〕」¹⁾の第一条に、「本誌は以下のものを歓迎する」として、6ジャンルに分けて原稿を募っている。

- (1) 早期に自由中国を回復する希望を人に与え、反共の勇気を鼓舞することのできるあらゆる文章。
- (2) 各国の鉄のカーテンの内側や中国の鉄のカーテンに覆われた地区の強権的専制的で残酷な事実を紹介するニュースやレポート。
- (3) 世界各国の反共的言論、書籍や出来事を紹介する文章。
- (4) 強権主義を粉砕するための有効な政策を研究する文章。
- (5) 共産党を打破した後、政治的民主と経済的平等にもとづく理想的な社会を建設するための概要を提示する文章。
- (6) その他、反強権的論文、談話、小説、木版画、写真など。

総じて言えば、雑誌『自由中国』は、自由中国の回復と反共産主義、反強権、反専制を標榜する論文、文芸を掲載することをその原則としていた。

金溟若は『自由中国』に「岐路」と「篩」²⁾という2篇の短篇小説を発表している。本稿では、まず金溟若の経歴をたどることから始め、次にこれら2篇の小説について登場人物の設定

や物語展開などを検討し、これらにおいて共産党勢力への嫌悪や告発が如何に描かれているかという「反共小説」としての質について考察する。

金溟若の経歴や作品についての先行研究は多くない。本稿で取り上げる「篩」については、応鳳凰(1998)に少し言及がある程度である。また、『自由中国』を文芸方面から考察した論考に、郭淑雅(2001)、徐筱薇(2004)、顔安秀(2005)、小山三郎(2007)などがある。

2. 金溟若の経歴について

金溟若については、国立台湾文学館『台湾現代作家研究資料彙編』(既刊100巻)に収録されていないことから、これまで十分に研究されてきた作家であるとはいいがたい。この項は方韶毅(2011)所収の「金溟若的「人間味」」を中心に、台湾や大陸で刊行された文学事典などのほか、朱正(1980)や方韶毅(2011)と、金溟若自身による散文やその子金恒煒(2012)や金恒杰(2017)による文章を参照した。

1) 出生から渡日、文学界デビューと魯迅との出会い

金溟若(1904-1970)は、本名を金志超といい、浙江省瑞安の出身である。幼時、教育家として著名な父、金嶸軒に従い来日し、東京で中学まで学んだ。中学時代には、国語教師の影響を受けて、石川啄木、夏目漱石など明治期の作家、有島武郎や厨川白村といった同時代の作家の作品とともに、トルストイ、ドストエフスキー、モーパッサン、チェーホフなどの西洋文学の日本語訳を読みふけたという。

帰省中、日本で関東大震災が発生したため、そのまま郷里にとどまり、父が校長を務めることになった浙江省立第十中学にて学んだ。同中学では、朱自清や劉延陵などの新進の文人を教

員として採用していた。当時、中国語運用能力に困難を抱えていたため、父の手配により朱自清に師事することになった。半年後、「孤人雑誌」というタイトルの散文を書き、朱自清の激賞を得て、五四時期に影響を持っていた『時事新報』の「学燈」副刊に発表する際、「溟若」の筆名を付けてもらった。その後、散文「我来自東」が、同様に朱自清の主宰する雑誌『我們的七月』に掲載され、金溟若は文壇で徐々に頭角を現すことになる。

瑞安の金氏が医家の家系であったこともあり、金溟若は中学卒業後、南通大学医科にしばらく学籍を置くが、ほどなく医学の道を放擲している。1926年、上海大学文芸院中国文学系を卒業し、28年には、上海で同郷の董每戡と出版社、時代書局を創設した。またその年には北新書局から散文と小説の合集『残燼集』を刊行している。その頃、冒頭に述べたように有島武郎「叛逆者」を翻訳したものの発表先を探している際に、魯迅の知遇を得て、その翻訳は雑誌『奔流』に掲載された。また、魯迅からは『有島武郎著作集』を翻訳するよう激励され、北新書局からは月給の形で金銭的援助を受けることになった。魯迅の日記には、金溟若への言及が合計27箇所あり、許広平への書信にも二度、溟若の訳稿について話題に挙げていることから、当時、魯迅から高い評価を受けていたことがうかがえる。

2) 魯迅との断絶と抗日戦争時期

しかし、金溟若は魯迅の期待を裏切ることとなる。金銭的援助を受けて生活がやや安定すると、金溟若はアヘンに手を出し、翻訳作業も滞り、金がなくなると無心するようになった。最終的にこの状況は魯迅の知るところとなり、金銭的援助も途絶え、面会することさえ拒否されることとなった³⁾。

抗日戦争が勃発すると、温州で永嘉学館を興

し、教育に従事する。その時期、南京の汪精衛政権の委嘱を受け、塩の運搬業者である「興華荘」の総経理を務めた。方韶毅（2011）では、興華荘で運輸部副部長を務めたという陳于濱の回想文⁴⁾を引いている。「興華荘は塩の運搬の他に、不定期に麻薬を販売しており、金溟若が一手に請け負っていた」「当時はアヘン窟が林立し、ヘロイン、アヘンはすべて金溟若によって供給され、損害の凄まじさは計りがたく、金はこれによって大儲けをした」などと述べている。また、興華荘には、親しく交遊する日本軍憲兵隊や、汪精衛政権の関係者だけでなく、内地の国民党政府の塩業関係者までもが集い、金はフィクサーとして暗躍したが、抗日戦争終了後、塩業の利権と引き換えに「漢奸」としての追求を逃れたとの記述まである。

「アヘン吸引」と「対日協力」のエピソードは、にわかに信じがたいものがあるが、方言（2007）のように金溟若を「灰色」と看做す資料の存在することには留意すべきであろう。今後、他の資料を俟って再検討を行うべきであることは確認しておきたい。今は、金溟若の息子である金恒煒による抗日戦争時期についての記事（2012）を引いておく。

父は郷里に戻り、教科書がひどく不足しているのを解決するため、山海出版社を設立することを決め、全国の優秀な人材を網羅し、各種教科書を編纂した。作家の琦君女史はある文章で、初めて父の名前を知ったのは、当時の教科書であったと書いていた。一方で、父は復華荘という塩舗を開き、塩の運搬に従事した。教科書というのは文化事業で、永遠に儲からない商売だが、賞賛を得られるけれども、最終的に倒産は免れ得ない宿命にある。逆に塩の販売は大いに儲かるので、出版社の欠損を補填することができる。出版は父の趣味に過ぎないが、

塩業あってこそ出版の欠損を補うことができる。

これによると、対日協力はさておき、興華荘は文化事業の欠損を補填するために行った事業であったとしている。

3) 大陸から台湾へ

金溟若が初めて台湾に来たのは、1945年の冬、当時の基隆市長からの要請に応じて接収委員として市役所の公文書の接収と管理の手伝いとしてであった。1946年1月、台湾省編訳館⁵⁾で編審（上位の編集担当者）として着任する。それは魯迅の摯友であり、同館館長でもあった許寿裳の招聘を受けたものであった。編訳館廃止後は、台湾大学文学院中国文学系教授兼主任となった許寿裳とともに、中国文学系副教授に就任する。1948年2月に許寿裳が殺害（謀殺の説あり）された直後、台湾を離れて郷里に戻っている。郷里が共産勢力の支配下に落ちた後、1949年の年末、再び台湾に戻る。その後は、中壢中学、台北第一女子中学などの教員、『大衆日報』副刊の編集長などを務めるかたわら、散文、小説を執筆し、日本文学などの名著や実用書の翻訳もしている。

散文集に『自己話・大家話』（自由大西洋文化事業公司、1965）、『人間味：金溟若散文集』（円神出版、1986）、小説集『白痴的天才』（晨鐘出版社、1974）がある。翻訳に、厨川白村『出了象牙之塔』（志文、1968）、川端康成『美麗と悲哀』（志文、1974）、川端康成『雪郷』（立志、1968）、三島由紀夫『愛的飢渴』（志文、1984）、サルトル『沙特小説選』（志文、1972）など、実用書に、沖正弘『瑜伽的哲学分析与方法』（台湾商務印書館、1968）、竹村健一『簡速英語 英語自習欣賞文庫』（志文、1966）などがある。

3. 「岐路」について

「岐路」という作品は、共産党勢力の支配下に入った後の、中国大陆 A 城という沿海の小さな商業都市にある高級商業学校での学生運動を描く 6000 字程度の短篇小説である。梗概は以下の通りである。

ある高級商業学校にて、理事である杜師参を批判する会議が、学生たちによって開催されていた。会議を主催するのは、主席の施徳曾ら共産党員になることを希望する学生運動活動家であった。施徳曾は、杜師参の娘である杜淑英にも父親を告発するよう迫った。郷里の農民同士の争いを仲裁し、農産物などの謝礼を受け取ったことがその罪悪とされた。

今回の学生運動は、指導主任陳春波を追放し、一段落を告げたが、大きな騒ぎにならなかったのは、杜師参が学校当局と県政府教育科に斡旋したからであった。今回の学生運動の黒幕のひとりである夏瑞珍は、淑英の同級生で、情熱的だが、意志が弱く、利用されやすい性格であった。淑英は瑞珍から共産主義少年先鋒隊への加入を勧められる。淑英は悩みつつも加入志願書を瑞珍に手渡した。A 城解放後、先鋒隊は地下組織から公然組織に代わったが、以前と違い、今はリーダーの施徳曾が牛耳り、自由な雰囲気は失われていた。

淑英は、抗戦将士紀念亭に一人登り、解放後、施と夏と自分の間の不愉快なもめ事について考え直してみた。また自分が共産党員となるには多くの欠点を持つこと、不徹底で、知識分子としての意識が濃厚であることを反省した。しかし、解放後数ヶ月のうちに、目の前の現実理想を駆逐していた。

淑英は、自分が今岐路に立っていることを思った。共産党は革命の外套をまとってはいるが、その中身は反革命であると気がついた。「もう動揺はしない」と決心した淑英は書き置きを残

し出奔した。

本作品は、先に挙げた「微稿簡則」を踏まえると、まずは共産党勢力の強権的専制的な内幕を暴露し批判する「反共小説」として読むべきである。

学生運動を描いている以上、主要な登場人物は高等商業学校の学生であるのは当然であるが、学校を追われた指導主任や、杜淑英の父親であり理事でもある杜師参など「大人」たちは、自らを批判し追求する学生たちと激しく議論を闘わせる訳でもなく、どこか別世界の住人であるかのような、現実味の希薄な存在として描かれている。それにとどまらず、学生運動の過程で学生側の犠牲者が出ず、「円満に」解決している背後には、杜淑英の説得に応じた父親が、学校当局や県政府の教育部門に斡旋した結果であるとされている。つまり、施徳曾ら共産党員になりたいと願う若者たちが遂行しつつある「革命」は、「大人」たちに管理された箱庭での兇戯に等しい騒動であると言っているようなものである。まずは、革命の成就のためには肉親をも告発し闘争を挑む共産主義者に対する批判と嫌悪が示されているが、大人たちに管理された箱庭での革命という枠組みからは、「大人」たるソビエト共産党とその独裁者スターリンの指図によって操られた、毛沢東、朱徳らの「子ども」による革命ごっこが中国共産党による革命であるとも読めよう。それを暗示するように作中には、間近に迫った人民政府成立を記念するデモ行進で掲げられる予定のスターリンの巨大な肖像が、薄気味悪い笑みを浮かべているように見えたため、杜淑英が慌てて逃げ出す場面がある⁶⁾。結局、「革命の外套をまとった反革命である」共産党の真の姿に気づき、「安全で自由な場所」を目指して淑英は一人出奔する形でこの作品は閉じられている。

しかしながら、この作品には「反共小説」らしからぬところが存在する。そもそも淑英が目

指した場所は、「復興中華、反共抗ソ」の根拠地たる台湾とは明示されていない。それ以外にも、革命を志す若者による「解放」前の政権に対する批判の言辞を借りて、台湾に存在する現政権を「無能」と批判しているかのように読み取れる箇所がある。

この無能な政権を根本から取り除いて、新民主主義と取り替えるのだ。さもなくば我々中华民族は永遠に帝国主義によって奴隷のごとく使役されるのみで、永遠に崛起する日が来ることはない。この偉大な使命、つまり人民を非民主的で無能な政権から解放することが、我々若者の責任なのだ⁷⁾。

人民を無能で腐敗した政権から解放し、帝国主義の軛から解き放ち、真の独立自由と民主を勝ち取ることが、自らが彼らの組織に加入しようと決めた動機であつた⁸⁾。

また、共産党の政権下で不適切な教材を採用したり、発言を行った教員たちが学校を追われたり、軍事管制委員会の事情聴取のあと行方不明になったりしたことに、誰もが関心を持っているのに、それを口に出せない状況に対して、淑英が「これがもし国民政府の時代に発生していたら、どんな事になっていたろうか」⁹⁾と思う場面がある。「もし…発生していたら」とは、かつても「発生していた」ないしは「今も発生している」と言っているように読めないだろうか。現に当時は台湾では「白色テロ」の嵐が吹き荒れていた。金溟若を台湾に招いてくれた許寿裳もすでにその犠牲者となっていた。

4. 「篩」について

「篩」は、『自由中国』第4巻第9期と第10期に連載された約18000字の短篇小説である。匪区（共産党支配地区）で迫害を受けて、台湾

に逃れてきた義民（義勇の人民）たちを描いている。梗概は以下の通り。

台湾省政府 ×× 庁の科員である龔明仁の自宅には、大陸の P 県から逃れてきた「輝かしい経歴とすぐれた展望をもった」「義民」と自認する失業者が居候していた。多い時には15、6人が出入りしていたが、出仕の手立てのある者は官舎を得て去り、各県市にちらばっていった。

今も居候する義民たちは、共産党勢力の手に落ちた中国の動向や朝鮮戦争勃発後の激動する国際情勢について、日々空論を闘わせていた。彼らの中には、詐欺や不法行為を繰り返してまでも、いつか自分が登用され台湾で現下の権力に食い込み、利権の恩恵に浴することを夢見る者がいる一方で、旧友の率いる反共部隊に参加することを計画する「老粗（粗忽者）」の滕子英や、共産党勢力に拉致され行方知れずになった父親の敵を討つため、軍隊に加入しようと台湾にやって来た元小学校教員である林士鑫などのような人物もいた。

林士鑫が入隊し三ヶ月が経った。台北に戻り、滕子英が「反共抗自自救救国軍」の参謀長として、神溪から香港澳門一帯の山中でゲリラ活動をしているという知らせをかつての居候仲間に告げたが、彼らの反応は冷たく無関心で、自分たちの金儲けの話に夢中であつた。

この作品も、大陸反攻を志して従軍する人物や、共産党支配下の専制やそれによってもたらされた飢餓を描いてはいるものの、「反共復国」と言うよりは、過去の栄華を懐かしみ、国民党政権の利権のおこぼれに預かるために蠢く「義民」たちが続々と登場する。

高官の屠主席の覚えめでたい白鵬飛が、主席の次女と映画を見に行ったことを居候仲間にひけらかそうと意気揚々と帰宅する場面からこの作品は始まる。建国の元勳と繋がりのある父親を持ち、名士の娘と結婚するが、台湾 T 市の警察局長を務めるも、自らの不正がもとで免職

になり、一旦大陸に逃亡するものの、共産党政権樹立後、再び台湾に舞い戻ってきた人物である。

また、何英傑は1945年の台湾接收時、福建のある部隊の班長であつたが、渡台後、ある県の警察局の刑警隊隊長となった。二二八事件後、現地の民衆に対する詐欺行為で訴えられ懲戒処分を受け、その後、白鵬飛警察局長の部下になったのだが、半年も経たぬうちに今度は公共物を不正に売却したことが発覚し、台北へ逃亡してきた。

大陸時代に上司に追従して県長を2期務めた彭桂丹は、ため込んだ財産を「解放」後すべて没収され、命からがら上海経由で台湾へ逃げてきた。長年追従してきた上司の台湾での活躍に比して、自身の現在の境遇に不満を持っている彭は、患難を共にした知人が書いた共産政権の悪政を告発する論文を奪い、自らの才能を売り込むために自らの名義に改め新聞に発表しようとするのである。

利に聡い彼らは、朝鮮戦争勃発後、アメリカが第七艦隊を派遣して台湾防衛に加担するようになって以降、それまで共産党による台湾「解放」を恐れて、香港や澳門に留まっていた投機主義者たちが、続々と台湾を訪れようとしているという情報を得て、侃々諤々の議論を闘わす。その内心の醜悪さを告発する金溟若の筆鋒は鋭い。

彼（彭桂丹のこと。筆者注、以下同様）は心中、共産党が彼に罪惡を清算させ、闘争にかけようとしたため、鉄のカーテン（大陸）から逃げ出して台湾に来ざるを得なくなったことを、災い転じて福となったと密かにほくそ笑んでいた。目下のところ未だ何の官職にもありついてはいないものの、将来、反共の時には、自分のコネクションをもってすれば、接收業務の大官などにも

なれぬ訳はなかろう。抗日戦争勝利の際、大後方（国民党支配下の西南・西北地区）からやって来た忠義の士のごとく、「重慶から来る人はただ者ではない、道行く姿も話す言葉もまるで虹が立つかのよう」に間違いなくなれる¹⁰⁾。

しかし彼（何英傑）は、法網の辺縁で足掻く人々の手助けをしたり、港で密貿易をする奴らから如何に搾り取ってやろうかと思案する以外には、彼の興味を引くものなど何もなかった。とりわけ国家の大事は、彼からますます遠くなっていった¹¹⁾。

彭桂丹にしても何英傑にしても、国家の大事たる「反共復国」などは自らの金儲けの手段でしかなく、その暁に得られるであろう利益のためには、共産党の支配から逃れて台湾に来たこともほくそ笑むことすらできる災いにすぎないのである。

また、この作品の登場人物には、金溟若の経歴が投影されていると思える箇所がいくつかある。「ある月の無い、風の強い夜、彼（林士鑫）は海と山に囲まれた郷里を出て、帆船に乗って鉄のカーテンから逃れ、海峡を渡って残されたこの自由の土地へ到着したのだ」¹²⁾ などという描写は、同時期の新聞『新生報』副刊に掲載された散文「国旗礼賛」で触れられている自らの大陸脱出時の記述と似通っている。その他、何英傑が1945年の台接收時に渡台しているのは、金溟若が1945年の冬に接收委員として基隆に來訪したと重なる。さらに、匪区での共産党の暴虐を告発する論文を彭桂丹に奪われた中学の国語教員陳彥文は、新聞の副刊にちょっとした文章を書いて、わずかばかりの原稿料を稼いで日々を暮らしている人物として設定されているが、これなどは当時の金溟若そのものである。

本作品には「汰去秕滓者，菁華乃出」というエピグラフが付されている。この句は『新唐書』巻174「楊嗣復伝」¹³⁾ から引いたものである。日本語に直すと「屑や滓を取り除いてこそ、優れた者が表面に現れてくる」になる。楊嗣復は唐代の宰相である。『新唐書』によれば、門下侍郎への昇進時、文宗にある政庁の人員削減を進言した際の言葉である。それに対して文宗は、唐代玄宗時代の宰相蕭復になぞらえて「言にくいことでも必ず言う」と賞賛している。そして作品名は「篩」である。「大陸から台湾に大量に流入してきた「人材」を自認する人々には、「秕滓」も「菁華」も混淆している。大陸反攻、国家発展のためにも雑多な「種子」を篩にかけよ」というのが作者金溟若の創作意図であることは容易に読み取れよう。

そのことは登場人物の口を通してでも作中で語られている。滕子英が「この大転換の時代に、まもなく到来する嵐に対して如何に我が身を置くべきか」と自問自答する場面においてである。やや長くなるが以下に引く。

彼（滕子英）は、彭桂丹が大陸での過去の借りを返してもらおうなどという、古くさいやり方で新しい生命を汚そうとすることに賛同しない。そんなことは上手く行く筈が無いともわかっている。あわよくば官位を得ようと、今は亡き父親を出汁にして、自分の能力以上の地位を得ようとしている白鵬飛には、彼はもっと納得していない。このような環境では、白冬生（白鵬飛の父親）には既に何の力も無い。ここでは自分の力量に従い、さらに粉骨砕身しなければならないのだ。技量に見合った活躍しかできないのだ。過去の官僚的な作風は、この自由中国の基地では通用しない。思想もなく、ただ金儲けしか知らない何英傑に至っては、更に言うに及ばない。しかし林士鑫

という若者はよい。軍に入ろうと、それも戦闘部隊に入ろうとしているらしいではないか¹⁴⁾。

40を過ぎた人間は、老いているのだろうか。自分のような者はどうだろうかと考えた。(略)老幼は年齢では計算できない。その個人の魂の優劣に従って解釈すべきであると、何かの本にそう書いてあったのを思い出した。そうだ、蔣総統やマッカーサー元帥のことを老いていると言えるだろうか¹⁵⁾。

この作品が発表された1950年当時、金溟若は40代半ばであった。では、滕子英の自問自答は、そのまま金溟若のものと捉えてもよいのだろうか。当時の金溟若の胸の内が吐露された文章はない。白色テロの横行する当時の時代状況を勘案すれば、これは仕方のないことである。前掲の金恒煒の記事によると、「政治や政党に依拠せず、徒党を組むのを好まなかった」「『中華日報』の主筆にあった時や、中国広播会社の在職時に、「頑なに国民党に入党しなかった」ため職を追われた」のだという。また、警総(台湾警備総司令部のこと。戒嚴令下の治安維持を名目に異見分子の摘発、弾圧を行った)の監視対象として「常連」だった金溟若のことを「父親は左翼に同情的であった」とも言っている。

5. おわりに

当時の「反共」意識の濃厚な文学状況の中、やはり「反共」「反専制」「反強権」を趣旨とする雑誌『自由中国』に掲載された「岐路」と「篩」は、必ずしも「反共」一辺倒ではない、思索性と文学性に富む作品であった。

共産党支配への嫌悪は描かれているものの、「岐路」においては、主人公杜淑英の共産党とその革命への訣別は、それが「大人」たるソビ

エト共産党の管理する箱庭で行われている「子ども」の戯れ事であり、「真の革命ではない」からであった。また、「篩」においては、台湾に流れ着いた大陸からの政客たちが、過去の栄華を懐かしみ、国民党政権の利権のおこぼれに預かることに汲々とする姿を詳細に描き出し、内戦での敗北と台湾への撤退の原因は他でもなく彼らのそのような姿勢にあり、大陸反攻という大転換の時代においては淘汰されるべき存在であると容赦ない批判を浴びせている。

ただ、「岐路」においては、出奔した杜淑英の目的地は「安全で自由な場所」であったが、それは必ずしもそのまま国民党統治下の台湾であるとは明示されなかった。さらに、共産革命を志す若者たちによる「解放」前の政権に対する批判の言辞を借りつつ、今は台湾に存在する現政権を「無能」と批判しているように読める箇所も見られるなど、応鳳凰の言うように「30年代の写実精神を充分に継承する」金溟若の鋭い筆鋒は、共産党の支配下の鉄のカーテンの向こうにとどまりはしなかった。

台湾に移り住んで以降の金溟若は、中学の教員や新聞副刊の編集者を務める傍ら、散文、小説を執筆し、日本文学などの名著や実用書の翻訳をしている。その中でも、散文、小説には、文化界や教育界での不正や悪習に対して告発、批判したものが多い。最晩年に交流のあった在米の中国文学研究者夏志清に「教育小説家金溟若」という文章がある。これは金溟若の没後、その子供たちが刊行した小説集の序文として書かれたものであるが、その中に「仇の如く悪を疾む正直の人」と金溟若を評する箇所がある。夏志清がある大学教授の剽窃問題を告発した際、金溟若がそれを受けてその不正を許す土壌を作っている大学当局や教育部、出版社を批判する文章を書いたことがあった。また、金恒煒による父を回想する文章には、「道徳的な勇氣によって、暗闇に隠匿された一切の悪と戦い、

公平と正義を求めようとした」金溟若のありし日の姿が記されている。金溟若は、生涯、政治や政党に依拠せず、そのために職を失い、公安警察の監視対象となろうとも自らの節を枉げることはなかった。

それだけに大陸から出ている「灰色」金溟若に関する資料についてはにわかに信じがたい部分があるものの、その妥当性については継続して検証すべきであろう。

さらに金溟若には「篩」と同時期に発表された「石教授」という小説がある。この作品も、表面的には共産党による迫害とそれからの逃亡という反共小説の体裁を一応は取りつつ物語は展開していくのだが、一般的な反共小説のように「共産勢力＝邪悪、国民政府＝正義」の図式に完全に依拠したものではない。これらについての検討は今後の課題としたい。

謝辞：本研究は JSPS 科研費 16K13213 の助成を受けたものである。

【参考資料】

- ・『台湾文学辞典』、広西教育出版社、1991年7月
- ・『台港澳及海外華人作家詞典』、南京大学出版社、1994年12月
- ・『中華民国作品目録（新編）』第2巻、行政院文化建設委員会、1995年3月
- ・『中華民国作家作品目録 1999』第3巻、行政院文化建設委員会、1999年6月
- ・『台湾文学雑誌展覧目録』、文訊雜誌社、2003年7月
- ・『魯迅全集』第16巻、人民文学出版社、2005年11月
- ・『台湾文学史小事典』、国立台湾文学館、2014年11月
- ・金溟若「国旗礼賛」『新生報』副刊、1950年11月7日。『人間味：金溟若散文集』（円神出版社、1986年8月）所収。
- ・金溟若「石教授」『文芸創作』第1期、中華文芸獎金委員会文芸創作出版社、1951年5月4日
- ・金溟若「我与国文」『中華日報』「文芸」副刊第171期、1953年10月20日。『人間味：金溟若散文集』所収。
- ・金溟若「懷念朱自清先生」『伝記文学』第5巻第5期、1964年11月。『人間味：金溟若散文集』所収。
- ・金恒煒「父親の筆」『人間味：金溟若散文集』所収。
- ・夏志清「教育小説家金溟若」『白地的天才：金溟若紀念小説集』晨鐘出版社、1974年12月
- ・朱正「董每戡同志二三事」『新文学史料』、人民文学出版社、1980年第4期
- ・陳于濱「“興華莊”之謎」『温州文史資料：第二輯 紀念抗日戦争勝利四十周年』、中国人民政治協商會議浙江省温州市委員会、1985年9月
- ・葉漢龍「温州三次淪陷見聞」『温州文史資料：第二輯 紀念抗日戦争勝利四十周年』、中国人民政治協商會議浙江省温州市委員会、1985年9月
- ・応鳳凰『『自由中国』』『文友通訊』作家群与五十年代台湾文学史『文学台湾』第26期、1998年4月
- ・郭淑雅『国族の魅影、自由の天梯：「自由中国」と聶華苓文学』、靜宜大学（碩士論文）、2001年
- ・徐筱薇『戦後台湾現代主義思潮之出発：以「自由中国」、「文学雑誌」為分析場域』、国立成功大学（碩士論文）、2004年
- ・顔安秀『「自由中国」文学性研究：以「文芸欄」小説為探討対象』、国立台北師範学院（碩士論文）、2005年
- ・小山三郎『『自由中国』知識人の政治と文学：彼らの批判的文学精神について』、『杏林大学外国語学部紀要』（19）、2007年3月
- ・方言「灰色金溟若」『温州瞭望』2007年第19期
- ・方韶毅『民国文化隱者録』、秀威資訊、2011年7月
- ・金恒煒「懷想父親金溟若和他的時代」2012年10月

22日

http://wenichin.blogspot.com/2012/10/blog-post_22.html

(2019年3月22日確認)

・金恒杰『昭和町六帖』允晨文化、2017年11月

【注】

- 1) 『自由中国』第4巻第10期、24頁、1951年5月16日
- 2) 「岐路」は『自由中国』第3巻第11期(1950年5月1日)、「篩」は上篇が第4巻第9期(1951年5月1日)、下篇が第4巻第10期(同年5月16日)に掲載された。
- 3) 『魯迅日記』1929年10月10日に「金湜若来るも、会わず」とある。
- 4) 陳于濱の回想文は『温州文史資料』(1985)に掲載されたものである。「抗日戦争勝利40周年記念」として刊行された抗日戦争期、温州の政治、経済、文化情况についての記録である。
- 5) 台湾省編訳館は、国民政府による台湾接收後、「脱日本化」と「再中国化」なる統治政策に基づき設置された。中国語普及のための学校教材の編纂と、一般大衆を対象とした読み物の刊行、学術・文芸の名著の翻訳、日本統治時代の台湾研究の成果の継承をその任務としていたが、1947年5月、二二八事件後、台湾省行政長官の陳儀が失脚するのにともない廃止された。
- 6) 「岐路」32頁
- 7) 同31頁
- 8) 同32頁
- 9) 同32頁
- 10) 「篩」上篇24頁
- 11) 同上篇24頁
- 12) 同下篇21頁
- 13) 『旧唐書』にも「楊嗣復伝」はあるが、この句は見当たらない。
- 14) 「篩」下篇22頁
- 15) 同下篇22頁